

子どものからだづくりの試み 2 一園内での子どものけがをめぐる親の要求を受け止めて一

○金澤妙子(大東文化大学)

1. はじめに

日本子ども資料年鑑(2017)の「女性の働き方別、保育所・幼稚園のサービスで充実させて欲しいもの」が示すところによれば、「子どもの安全管理・事故防止」への要求度は20%未満と低い¹⁾

【資料 1】。これは安全が確保されていると見ることもできるが、子どもが園で安全に過ごせることは保育の大前提と捉えているのかもしれない。増田隆男²⁾は、様々な事故事例と事故後の対応の問題について示す中で、学校は、「教育活動」が目的で生活関係が成り立っているため監督義務の範囲が狭くなるが、「保育」というのは、学校などとは違って、そこで遊びも就寝もするという生活関係そのものが行われている点が重要視され、学校の場合よりも監督義務の範囲が広がることはやむを得ないことかもしれない、と述べている。乳幼児を対象とする保育の場では、生命を脅かしたり、大きな後遺症を残す事故への備えや避けるための努力、対応はさることながら、日常的に起こるひっかきや噛みつきなど、小さな傷やけがが起こり、親の対応も含め難しい。

ある園では、続けて起きた2名の4歳児の顔面の切り傷への園の対応(病院を受診・通院)に対する親の要求を受け止め再発防止を考えていく中で、子ども自身が鈍くなっている、移動は車ばかりの生活で子どものからだは鍛えられない、砂場でしゃがんで遊ぶことができず、ペタっとおしりをつけて穴掘りなどを行っている、など子どもの体力のなさに行き当たった。「安全な環境や保育士の配慮は不可欠だが、それだけではけがを防げない。日頃から子どもが自分の身を守る力の低下にも目を向けていく必要を感じており、保育士と子どもの両面から考えていきたかった」(A園長談)と、H26年から5年計画でけがをなくするための取り組みを始めた**【資料 2】**。公立園のため園長以下職員は異動し、その時の職員で問題意識を共有しにくくなっているが、この件に関して年間計画を作成し、手が出て自分を守れる子どもが育つ運動遊びや環境構成などを考えて、現在(H30)も継続中である。本稿ではこの取り組みに見られる3歳以上児の姿について考えていく。

1) 恩賜財団母子愛育会 愛育研究所編集. KTC 中央出版. 296

2) 保育所・幼稚園で事故が起きたとき一対応と安全管理(2004). かもがわ出版. 33-36

2. 研究方法

私はこの地域で保育実践を検討する有志の研究会に年約3回約11年間参加してき、けが発生当時からA園長とは既知の間柄であった。退職に際し、後任のB園長に私の関心を橋渡ししていただき、参与観察を続けた。この間園内では、子どものからだづくりの取り組みを継続し、記録、随時まとめが行われている。起きてしまった園内のけがをめぐる親の要求を受け止めた園側のあ

り方を追いたいと思い、この取り組みの実践記録の提供をお願いし、実現した。保育実践の参与観察と園訪問時の保育者や園長への聞き取りとその記録、取り組みの実践記録から考える。観察は平成26年度8回、平成27年度5回、平成28・29年度各3回、平成30年度7月現在1回。

3. 3歳以上児の姿取り組みの様子【資料3】

(1) 年間目標、その展開について

年少年間目標:クモ歩き(前後に動く)/4月～⇒クモ歩きのポーズ(10秒間キープ)/7月～

年中年間目標:クモ歩き・机に手をつけて足を浮かせる(10秒間キープ)。

年間目標はほぼ1つ。前年の反省をもとに少しプラスし無理がない形である。また目標へ向けて、子どもたちができること・できないことをチェックし、お尻をあげて動くことが苦手だとすると腹筋と腕の力がないのではと考え、どのような取り組みをしていくかを2つの軸<たくさん走る 思い切りからだを動かす><バランスをとる・手をつく姿勢を経験する>から考えていく(年中)。

(2) 実践の振り返りから

<年長7月子どもの様子> ・机に手をつけて、体を浮かせる(10秒)動きは、ほとんどの子ができるようになった。

・ケンケンでかかとをあげるとバランスを崩す子が多かった。

・雑巾がけ→正しい姿勢できない子(○組7名、△組10名 ☆組・・・・)。

・雑巾がけ「もう1回やる～!」と楽しく取り組んでいた。(後略)

<年長8月の取り組み> ・机に手をつけてからだを浮かせる・足を前後に動かす(両足を揃える→両足を交互に動かす)。

・ケンケン、スキップ、ひざ立ちペンギン歩き、クモ歩き。雑巾がけ。

・プールの中で、バランスをとりながら全身を十分に動かす経験を重ねる(歩く、走る、鬼ごっこなど)。

◎ケンケン相撲楽しんでいく。

必ず当該月の子どもの姿の押さえがあつて、それを少し重複しつつ次の月の構想がある。

(3) 「※できない子は、1つ前に戻って取り組む」という毎月繰り返される記述が示すもの

この記述から、各々のステップを無理なく確実に踏み固めていこうとする意図を感じる。できるか否か見ている、できることに追い込むことにブレーキをかける作用も持ったのではないかと。

4. おわりに

私は運動・からだづくりだけを取り出すことに懐疑的だった。自ら関心のある遊びの充実を中心とした保育を目指しているが、時間で保育の流れを区切る、室内と戸外を自由に行き来して遊べない保育のあり方が変わると、子どもの動きも自然に活動的になり、個々の遊びも充実しつつ、からだも鍛えられると考えていた。何度伝えてもそう動くことはなかったが、取り組みの方向の3点(体を動かす、手をつく、バランス)は常に意識され、その後の観察では子ども達のからだを動かす活動・機会は以前より増えていると感じる。事故発生当時からの保育者の、からだを動かす遊びの提案も非常にうまく・広がりがある【資料4】。けがが減るわけではなくても、意識し続けてきた結果だと思う。統計を取らなくなったことは、保育が日常に戻ったとも言える。日常に戻っても意識し続けるところにこの取り組みの定着があり統計上の成果に変わる成果だと思う。